



TITLE:

保型 L 関数の d -aspectについて (解析的整数論とその周辺)

AUTHOR(S):

上西, 千春

CITATION:

上西, 千春. 保型 L 関数の d -aspectについて (解析的整数論とその
周辺). 数理解析研究所講究録 2004, 1384: 101-108

ISSUE DATE:

2004-07

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/25738>

RIGHT:

保型 L 関数の d -aspect について

慶應義塾大学 理工学部 数理科学科 上西 千春 (Chiharu Kaminishi)

Department of Mathematics, Keio University

1 凸評価と aspect

本稿の目的は, 判別式 d の虚 2 次体で定義される Bianchi group に対する保型 L 関数の d -aspect の凸評価を求めることである. 本節では凸評価と aspect について説明する.

Riemann zeta 関数 $\zeta(s)$ やそれに類似した L 関数 $L(s, f)$ の $\Re(s) = 1/2$ 上での値の評価を考える問題がある. ここでは L 関数の臨界線が $\Re(s) = 1/2$ であるように, (すなわち関数等式が s と $1-s$ の間で成り立つように) L 関数が正規化されているものとする. L 関数の収束域における評価と関数等式を用いることにより, 臨界領域 $0 \leq \Re(s) \leq 1$ 以外の部分における評価はよくわかる. 臨界領域内において良い評価を得ることは一般に困難であるが, Phragmén-Lindelöf の凸定理を用いて荒い評価を得ることができる. これを凸評価と呼ぶことにする. 以下に凸評価の例を挙げる.

例 1 Riemann zeta 関数

$$\zeta(s) = \sum_{n=1}^{\infty} \frac{1}{n^s}$$

の凸評価は

$$\zeta\left(\frac{1}{2} + it\right) = O\left(t^{\frac{1}{4} + \epsilon}\right), \quad \forall \epsilon > 0, \quad t \rightarrow \infty.$$

例 2 合同部分群 $\Gamma_0(N)$, $N \in \mathbb{N}$ に対する 2 次元上半平面 \mathbb{H}^2 上の正則な Hecke eigen cusp form $f_N(z)$ の L 関数

$$L(s, f_N) = \sum_{n=1}^{\infty} \frac{\lambda_N(n)}{n^s}$$

(ここで $\lambda_N(n)$ は Hecke 作用素に対する $f_N(z)$ の固有値.) の $\Re(s) = 1/2$ 上の N -aspect の凸評価は

$$L\left(\frac{1}{2} + it, f_N\right) = O_{\epsilon, t}\left(N^{\frac{1}{4} + \epsilon}\right), \quad \forall \epsilon > 0, \quad N \rightarrow \infty.$$

例2のように、 N 以外の変数による値を定数とみなし、 $N \rightarrow \infty$ の振る舞いのみに注目するという意味を含めた変数 N に関する評価のことを N -aspect という。このほか、Dirichlet L 関数で指標の導手を動かす q -aspect, 保型 L 関数で保型形式の重さを動かす k -aspect, Maass form の L 関数でラプリアンの固有値を動かす r -aspect などがこれまでに研究されている。

本稿では、 L 関数の評価に関する新たな aspect として虚2次体 K の判別式 $d < 0$, $d \neq -3, -4$ を動かす ' d -aspect' を提唱する。評価の対象となる L 関数は、 K の整数環 \mathcal{O}_d 上の Bianchi group $\mathrm{PSL}(2, \mathcal{O}_d)$ に対する Maass form $\phi_{d,r}(\omega)$ の L 関数 $L(s, \phi_{d,r})$ であり、以下のような d -aspect の凸評価を得ることができた。(注1)

$$L\left(\frac{1}{2} + it, \phi_{d,r}\right) = O_{\epsilon,t,r}\left(|d|^{\frac{1}{2} + \epsilon h(d)}\right), \quad \forall \epsilon > 0, \quad |d| \rightarrow \infty. \quad (1)$$

ここで $h(d)$ は K の類数である。また同様に t -aspect, r -aspect も得ることができる。(注2)

次節より表記が煩雑にならないように添え字を省略して $\phi_{d,r} = \phi$ と書くことにする。

2 Maass form と L 関数の定義

本節では、本稿で扱う Hecke eigen even Maass cusp form と L 関数の定義を説明する。

\mathbb{H}^3 を 3 次元上半空間

$$\mathbb{H}^3 = \{\omega = (y, z) \mid y > 0, z = x_1 + ix_2 \in \mathbb{C}\}$$

とすると $\Gamma = \mathrm{PSL}(2, \mathcal{O}_d)$ は \mathbb{H}^3 に一次分数変換で離散的に作用する。商空間 $\Gamma \backslash \mathbb{H}^3$ 上のラプリアン

$$\Delta = -y^2 \left(\frac{\partial^2}{\partial x_1^2} + \frac{\partial^2}{\partial x_2^2} + \frac{\partial^2}{\partial y^2} \right) + y \frac{\partial}{\partial y}$$

は $L^2(\Gamma \backslash \mathbb{H}^3)$ 上に自己共役拡張を持ち、 Δ の固有値 $1 + r^2$ は正の実数となる。この固有値 $1 + r^2$ に対する固有関数を Maass form $\phi(\omega)$ といい、さらに全ての cusp \mathfrak{a}_n ($1 \leq n \leq h(d)$, $\mathfrak{a}_1 = \infty$) に対して $\phi(\mathfrak{a}_n) = 0$ であるとき、

ϕ を Maass cusp form という. Maass cusp form の集合を $\mathcal{S}(\Gamma, r)$ とおく. [7] (1) 式より $\phi \in \mathcal{S}(\Gamma, r)$ の cusp ∞ での Fourier 展開は以下のように表される.

$$\phi(\omega) = \sum_{0 \neq \nu \in \mathcal{O}_d} c(\nu) y K_{ir} \left(2\pi \left| \frac{2\nu}{\sqrt{d}} \right| y \right) e \left(\Re \left(\frac{2\nu}{\sqrt{d}} z \right) \right).$$

ここで $K_{ir}(z)$ は K -Bessel function である.

ι を \mathbb{H}^3 上の作用素 $\iota(y, z) = (y, -z)$ とする. $\phi \in \mathcal{S}(\Gamma, r)$ に対して $\phi \circ \iota \in \mathcal{S}(\Gamma, r)$ である. $\iota^2 = 1$ より固有値は ± 1 であり, $\phi \circ \iota = \phi$ のとき, ϕ を even といい, $c(\nu) = c(-\nu)$ が成り立つ. また $\phi \circ \iota = -\phi$ のとき ϕ を odd といい, $c(\nu) = -c(-\nu)$ が成り立つ.

Hecke 作用素 $T(\nu) : L^2(\Gamma \backslash \mathbb{H}^3) \rightarrow L^2(\Gamma \backslash \mathbb{H}^3)$ を以下のように定義する:

$$T(\nu)\phi(\omega) = \frac{1}{|\nu|} \sum_{\substack{\alpha\delta=\nu \\ \Re(\delta)>0}} \sum_{\beta \bmod \delta} \phi \left(\frac{1}{\sqrt{\nu}} \begin{pmatrix} \alpha & \beta \\ * & \delta \end{pmatrix} \cdot \omega \right).$$

$\mathcal{S}(\Gamma, r)$ には, 全ての Hecke 作用素の同時固有関数からなる基底が存在し, これらを Hecke eigen Maass cusp form という. $T(\nu)$ に対する $\phi(\omega)$ の固有値を $\lambda(\nu)$ とする. 即ち,

$$T(\nu)\phi = \lambda(\nu)\phi.$$

また, Hecke 作用素の性質から以下が成り立つ.

$$c(\nu) = c(1)\lambda(\bar{\nu}). \quad (2)$$

この性質より $c(1) \neq 0$ であることがわかる. 以降では, $d \neq -3, -4$ に関する Hecke eigen even Maass cusp form ϕ について扱う.

任意の ϕ に対して保型 L 関数を以下のように定義する:

$$L(s, \phi) = \sum_{0 \neq \nu \in \mathcal{O}_d} \frac{\lambda(\nu)}{N(\nu)^s}.$$

ここで $N(\nu)$ は ν のノルムである. この定義は ϕ が even のとき well-defined となる.

3 主定理

本節では前節で定義した保型 L 関数の d -aspect の凸評価を求める.

定理 3.1

$$L\left(\frac{1}{2} + it, \phi\right) = O_{\epsilon, t, r}\left(|d|^{\frac{1}{2} + \epsilon h(d)}\right), \quad \forall \epsilon > 0.$$

[定理 3.1 の証明] まず Rankin-Selberg method を用いて $\lambda(\nu)$ の平均的な評価を得る.

補題 3.2 任意の $X > 0$ に対し

$$\sum_{N(\nu) \leq X} |\lambda(\nu)|^2 \ll_{\epsilon, r} |d|^{\epsilon h(d)} X, \quad \forall \epsilon > 0.$$

ここで $X \ll_{\epsilon} Y$ とは, ϵ による定数 $C(\epsilon)$ が存在し, $|X| \leq C(\epsilon)Y$ が成り立つことを意味する.

補題 3.2 より $L(s, \phi)$ は $\Re(s) > 1$ において絶対収束し, 以下の評価が得られる.

$$L(1 + \epsilon + it, \phi) \ll_{\epsilon, r} |d|^{\epsilon h(d)}, \quad \forall \epsilon > 0. \quad (3)$$

次に $L(s, \phi)$ の関数等式を explicit に書き下す.

補題 3.3 完備 L 関数を以下のように定める:

$$\Lambda(s, \phi) = (2\pi)^{-2s} |d|^s \Gamma\left(s + \frac{ir}{2}\right) \Gamma\left(s - \frac{ir}{2}\right) L(s, \phi).$$

このとき $L(s, \phi)$ は全複素平面上に解析接続され, 以下の関数等式が成り立つ.

$$\Lambda(1 - s, \phi) = \Lambda(s, \phi).$$

補題 3.3 より

$$|L(s, \phi)| = \left(\frac{\sqrt{|d|}}{2\pi}\right)^{2-4\sigma} \left| \frac{\Gamma(1-s+\frac{ir}{2}) \Gamma(1-s-\frac{ir}{2})}{\Gamma(s+\frac{ir}{2}) \Gamma(s-\frac{ir}{2})} \right| |L(1-s, \phi)|$$

であるから, (3) 式を適用して

$$L(-\epsilon + it, \phi) \ll_{\epsilon, t, r} \left(\sqrt{|d|} \right)^{2+4\epsilon} |d|^{\epsilon h(d)}, \quad \forall \epsilon > 0.$$

よって再び (3) 式と併せて, Phragmén-Lindelöf の凸定理 ([6] Theorem 2) より臨界帯 $0 \leq \sigma = \Re(s) \leq 1$ での評価を得る.

$$L(\sigma + it, \phi) \ll_{\epsilon, t, r} |d|^{1+\epsilon-\sigma+\epsilon h(d)}, \quad \forall \epsilon > 0.$$

よって $\sigma = 1/2$ を代入し定理 3.1 が成り立つ. \square

4 補題 3.2 の証明

本節では補題 3.2 の証明の概要を述べる. 証明の方針は Iwaniec [2] Theorem 8.3 と同様である.

cuspidal a_n に対する Fourier 係数を $c_{a_n}(\nu)$ とおき, 以下のように normalize しておく.

$$\hat{c}_{a_n}(\nu) = \left(\frac{\sqrt{|d|}}{\|\phi\| e^{\pi|1+ir|}} \right)^{\frac{1}{2}} c_{a_n}(\nu).$$

この $c_{a_n}(\nu)$ を用いて Rankin-Selberg L 関数を以下のように定義する:

$$L_{a_n}(s, \phi \otimes \bar{\phi}) = \sum_{0 \neq \nu \in \mathcal{O}_d} \frac{|\hat{c}_{a_n}(\nu)|^2}{N(\nu)^s}.$$

$|\hat{c}_{a_n}(\nu)|^2$ の有限和の評価について

$$\sum_{N(\nu) \leq X} |\hat{c}_{a_n}(\nu)|^2 \ll |1+ir| + \frac{X}{|1+ir|} \quad (4)$$

が成り立つことから $L_{a_n}(s, \phi \otimes \bar{\phi})$ は $\Re(s) > 1$ で絶対収束し, Eisenstein 級数 $E_{a_n}(\omega, s)$ を用いて以下のような積分表示を満たす.

$$\Lambda_{a_n}(s, \phi \otimes \bar{\phi}) = \int_{\Gamma \backslash \mathbb{H}^3} E_{a_n}(\omega, 2s-1) |\phi(\omega)|^2 \frac{dz dy}{y^3} \quad (5)$$

ここで

$$\Lambda_{a_n}(s, \phi \otimes \bar{\phi}) = \frac{|d|^{s+\frac{1}{2}} \Gamma(s)^2 \Gamma(s+ir) \Gamma(s-ir)}{16(2\pi)^{2s} \Gamma(2s)} L_{a_n}(s, \phi \otimes \bar{\phi}),$$

$$E_{a_n}(\omega, s) = \sum_{\gamma \in \Gamma_{a_n} \backslash \Gamma} (y(\sigma_{a_n}^{-1} \gamma \cdot \omega))^{s-1}.$$

(5) 式と Eisenstein 級数の関数等式 ([1] Theorem 5.8) より $h(d)$ 個の成分からなるベクトル $\{L_\infty(s, \phi \otimes \bar{\phi}), L_{a_2}(s, \phi \otimes \bar{\phi}), \dots, L_{a_{h(d)}}(s, \phi \otimes \bar{\phi})\}$ は全複素平面に有理型関数として解析接続され, s と $1-s$ の間で関数等式が成り立つ. $\Re(s) > 1/2$ での極は $s=1$ のみで 1 位, 留数 $R = \text{res}_{s=1} L_{a_n}(s, \phi \otimes \bar{\phi})$ は

$$R = \frac{512\pi^4}{|d|\Gamma(1+ir)\Gamma(1-ir)\zeta_K(2)e^{\pi|1+ir|}} \gg \frac{1}{|dr|} \quad (6)$$

である. ここで $\zeta_K(s)$ は K の Dedekind zeta 関数である. (4) 式と関数等式, Phragmén-Lindelöf の凸定理より $L_\infty(s, \phi \otimes \bar{\phi})$ の $\Re(s) = 1 - 1/(h(d) + 2)$ 上での評価を得ることができる.

$$\exists C_1 > 0 \quad \text{s.t.} \quad (s-1)L_\infty(s, \phi \otimes \bar{\phi}) \ll |d(1+|t|+|r|)|^{C_1}. \quad (7)$$

Perron の公式と (7) 式より, 任意の $X > 0$ に対して以下を得る.

$$\sum_{N(\nu) \leq X} |\hat{c}(\nu)|^2 = RX + O\left(X^{1-\frac{1}{h(d)+2}}|d(1+|r|)|^{C_1}\right) \quad (8)$$

ここで $\hat{c}(\nu) = \hat{c}_\infty(\nu)$ である.

X が次を満たす程度に十分大きい場合に, 補題 3.2 が成り立つことを示す.

$$X \geq |d|^{C_2 h(d)} \gg_r \left(\frac{|d|^{C_1}}{R}\right)^{h(d)+2}.$$

ここで $C_2 > 0$ は定数である. このとき (6), (8), (2) 式より

$$\frac{R}{|\hat{c}(1)|^2} X \ll_r \sum_{N(\nu) \leq X} \frac{|\hat{c}(\nu)|^2}{|\hat{c}(1)|^2} = \sum_{N(\nu) \leq X} |\lambda(\nu)|^2 \ll_r \frac{R}{|\hat{c}(1)|^2} X,$$

が成り立つ. よって $R/|\hat{c}(1)|^2 \ll_{\epsilon, r} |d|^{\epsilon h(d)}$ を示せば補題 3.2 を導くことができる. $R/|\hat{c}(1)|^2$ は X に因らないので, $X = |d|^{C_2 h(d)}$ の場合に示せば十分である. partial summation を用いて, $L(X) = \sum_{N(\nu) \leq X} |\lambda(\nu)|^2 N(\nu)^{-1/2}$ の上からの評価を得る.

$$\frac{R}{|\hat{c}(1)|^2} X^{\frac{1}{2}} \ll_r \sum_{N(\nu) \leq X} \frac{|\lambda(\nu)|^2}{X^{\frac{1}{2}}} \ll L(X) \ll_r \frac{R}{|\hat{c}(1)|^2} X^{\frac{1}{2}}. \quad (9)$$

次に Iwaniec の方法 [3] (19) に従い, Hecke 作用素の性質を用いて以下を得る.

$$L(X)^2 \ll_{\epsilon} X^{\epsilon} L(X^2), \quad \forall \epsilon > 0. \quad (10)$$

(9) を (10) に代入し, 以下を得る.

$$\frac{R^2}{|\hat{c}(1)|^4} X \ll_r L(X)^2 \ll_{\epsilon} X^{\epsilon} L(X^2) \ll_r X^{\epsilon} \frac{R}{|\hat{c}(1)|^2} X.$$

従って $R/|\hat{c}(1)|^2 \ll_{\epsilon, r} X^{\epsilon}$. ここで $X = |d|^{C_2 h(d)}$ を代入すれば $R/|\hat{c}(1)|^2 \ll_{\epsilon, r} |d|^{\epsilon h(d)}$ が成り立つ.

以上より $X \geq |d|^{C_2 h(d)}$ の場合に補題 3.2 が成り立つことを導くことができた. $X < |d|^{C_2 h(d)}$ の場合については, Iwaniec [2] Theorem 8.3. に詳しいのでそちらを参照のこと. \square

5 注意

注 1 講演後に江上先生, 松本先生, 村田先生よりご指摘があり, 講演内容に誤りがあったことが判明しました. 本稿において (1) 式右辺の $|d|$ のべきを講演時の $1/2 + \epsilon$ ではなく $1/2 + \epsilon h(d)$ とすることで誤りを訂正します. ご指摘いただいた先生方に感謝いたしますと共に, 講演を聴講して下さった方々にお詫び申し上げます.

注 2 変数 r の振る舞いにも注意することで, 補題 3.2 の $\lambda(\nu)$ の平均的な評価は, d, r に因らずに求めることもできる.

$$\sum_{N(\nu) \leq X} |\lambda(\nu)|^2 \ll_{\epsilon} |d(1 + |r|)|^{\epsilon h(d)} X, \quad \forall \epsilon > 0. \quad (11)$$

(11) 式と補題 3.3 より, $L(s, \phi)$ の $\Re(s) = 1/2$ 上での評価を d, t, r どの変数にも因らずに求めることができる. 証明は定理 3.1 の証明と同様である.

$$L\left(\frac{1}{2} + it, \phi\right) \ll_{\epsilon} |\sqrt{d}(1 + |r|)|^{1 + \epsilon h(d)} (1 + |t|)^{1 + \epsilon}. \quad (12)$$

(12) 式より直ちに t -aspect, r -aspect を得ることができる.

$$L\left(\frac{1}{2} + it, \phi\right) = O_{\epsilon, d, r}(t^{1 + \epsilon}), \quad \forall \epsilon > 0, \quad t \rightarrow \infty,$$

$$L\left(\frac{1}{2} + it, \phi\right) = O_{\epsilon, d, t}(|r|^{1+\epsilon}), \quad \forall \epsilon > 0, \quad |r| \rightarrow \infty.$$

注 3 (11) 式について, $d = -4$, 即ち $K = \mathbb{Q}(\sqrt{-1})$ の場合は S. Koyama[4] により示されている.

注 4 補題 3.3 について, 一般の保型 L 関数に対して関数等式が存在し, 解析接続可能であることは既に知られている (Hecke Theory) が, 今回これを具体的に書き下した式を得ることができた. また $d = -4$, 即ち $K = \mathbb{Q}(\sqrt{-1})$ の場合は Y. Petridis and P. Sarnak[5] により示されている.

参考文献

- [1] J. Elstrodt, F. Grunewald and J. Mennicke, Eisenstein series on three-dimensional hyperbolic space and imaginary quadratic number fields, *J. Reine Angew. Math.*, **360** (1985), 160-213.
- [2] H. Iwaniec, Spectral method of automorphic forms, Graduate studies in mathematics 53, American mathematical society, 2002.
- [3] H. Iwaniec, Small eigenvalues of Laplacian for $\Gamma_0(N)$, *Acta Arith.*, **56** (1990), 65-82.
- [4] S. Koyama, L^∞ -norms of eigenfunctions for arithmetic hyperbolic 3-manifolds, *Duke Math. J.*, **77** (1995), no. 3, 799-817.
- [5] Y. N. Petridis and P. Sarnak, Quantum unique ergodicity for $\mathrm{SL}_2(\mathcal{O}) \backslash \mathbb{H}^3$ and estimates for L -functions, *J. Evol. Equ.*, **1** (2001), 277-290.
- [6] H. Rademacher, On the Phragmén-Lindelöf theorem and some applications, *Math.Z.*, **72** (1959/1960), 192-204.
- [7] S. Raghavan and J. Sengupta, On Fourier coefficients of Maass cusp forms in 3-dimensional hyperbolic space, *Proc. Steklov Inst. Math.*, **207** (1995), 251-257.